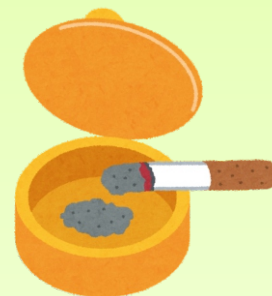




## 院長の独り言 (2016年6月17日執筆)



まだ精密な研究結果はありませんが、タバコの健康被害に「三次喫煙」という考え方が提唱され注目されています。タバコを吸っている人が自分でタバコの煙を吸うのが「一次喫煙」タバコを吸っている人から出るタバコの煙をそばにいる人が吸い込んでしまうのが「二次喫煙」です。二次喫煙を減らすために、公共の場所や職場での「分煙」は当たり前になってきています。ところが、今注目されているのは、タバコの煙そのものを直接吸い込まなくても、部屋や衣服に染み付いた煙の成分を吸い込む「三次喫煙」によって健康被害が起きる可能性があるということです。

「三次喫煙」が注目されるきっかけになった論文が2009年に米国で発表されています。それによりますと、タバコを吸った後の部屋にニコチン成分が残り、このニコチンが空気中の成分と反応して、発ガン物質として有名なニトロソアミン類へと変化することが立証されています。ですから、家や職場や飲み屋で部屋や衣類などに残った発ガン物質を日常的に吸い込むことで、ガンになる危険性が上昇する可能性があるのです。



国立がん研究センターの研究者によりますと、まだ仮説ではありますが、通常の大人よりも、妊婦や子供の方がより影響を受けやすい可能性があります。子供は身体が小さいので、同じ量の発ガン物質を取り込んでも、大人と比べますと影響が大きくなるようです。特にハイハイしている赤ちゃんは床との距離が近いですし、床に落ちているものを口に入れることもあるので、より影響を受けやすいと思われます。

「二次喫煙」「三次喫煙」を防止するためには、室内や車内での喫煙を決して行わないようにすることが最も重要です。服にニコチンを染み込ませて歩き回るのは、発ガン物質をまき散らしていることになるのです。

